

# 岩国市 第3分科会

## パネルディスカッション 地域みがきが人を呼ぶ ～関係人口を増やす～

### 歓迎挨拶

**福田 良彦** (ふくだ よしひこ)

岩国市長

### コーディネーター

**檜谷 邦茂** (ひのきだに くにしげ)

一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所 監事

### パネリスト

**西塔 大海** (さいとう もとみ)

西塔企画代表・慶応大学SFC 研究所上席研究員・元福岡県上毛町地域おこし協力隊

**寺本 隆宏** (てらもと たかひろ)

やましろ体験交流協議会会長

**野村 浩昭** (のむら ひろあき)

岩国市中山間地域振興課長

**舞田 敏和** (まいた としかず)

小さな集落の人たちが集う連絡協議会会長

**梅川 仁樹** (うめかわ ひとき)

岩国市農業委員会会長

**谷口 和正** (たにぐち かずまさ)

山代神楽連絡協議会会長



# パネルディスカッション

## コーディネーター



**檜谷 邦茂**氏  
(ひのきだに くにしげ)

一般社団法人  
小さな拠点ネットワーク  
研究所 監事

1979年島根県美都町(現益田市)生まれ、大学卒業後、東京でシステムエンジニアとして就職。4年半勤務した後、長男が生まれたタイミングで益田市へUターン。帰郷後は、まちづくり関連の仕事をしなが、アウトドア指導者として野外活動を通じた交流事業も展開。2013年から島根県中山間地域研究センターの地域支援スタッフとして中山間地域対策にも従事(現職)。2016年には仲間とともに、地域づくりの伴走支援を行う中間支援組織を設立。県内外の地域に出向いて講演やワークショップ、GISを用いた分析、ICTを活用した地域支援ツール開発なども手掛けている。

## パネリスト



**西塔 大海**氏  
(さいとう もとみ)

西塔企画代表・慶応大学SFC  
研究所 上席研究員・元福岡県  
上毛町地域おこし協力隊

福岡県上毛町在住。東京大学大学院修了。  
2013年福岡県上毛町に移住し地域おこし

協力隊となる。町の移住交流施策「みらいのシカケ」として「古民家リノベーション教育プログラム」や、お試し居住「上毛町ワーキングステイ」を実施。11世帯が暮らす里山集落に拠点をおき、年間1,000人が相談や見学に訪れる。2014年グッドデザイン賞受賞(地域づくり)。現在は、地域のプロジェクトマネージャーとして、移住定住、空き家活用、地域おこし協力隊企画、人材育成などをテーマに、西日本各地でプロジェクトを進行中。過疎地域の公共政策アドバイザーや、官民地域連携プロジェクトコーディネーターとしても仕事をしている。



**寺本 隆宏**氏  
(てらもと たかひろ)

やましろ体験交流協議会会長

平成18年よりNPOほつとにしき理事長  
(現在は副理事長)、平成23年よりやましろ  
体験交流協議会会長を務める。過疎地域の  
活性化に向けた活動や体験型教育旅行  
の受入等を通じて、都市住民と地元住民との交流を図る活動を実施。



**野村 浩昭**氏  
(のむら ひろあき)

岩国市中山間地域振興課長

採用年月日 昭和59年4月1日  
勤続年数 34年  
(平成30年4月1日現在)

昭和59年4月1日 玖珂町役場配属  
平成29年4月1日 岩国市中山間地域振興課長



**舞田 敏和**氏  
(まいた としかず)

小さな集落の人たちが集う  
連絡協議会会長

1951年生まれ。平成21年に広島より  
錦町へUターン帰郷。小規模高齢化集  
落が抱える課題の解決策を探り、安心

して住める地域にしていきたいとの趣旨で、平成25年に発足した「小さな集落の人たちが集う連絡協議会」の設立と同時に役員、平成28年より同協議会会長に就任。玖北地域に多くある小規模高齢化集落の実態把握を行い、現状等について理解を深めることを目指し、行政とタイアップして集落点検を実施。



**梅川 仁樹**氏  
(うめかわ ひとき)

岩国市農業委員会会長

平成28年4月に全国的にも一番早い段階で「農地利用最適化推進委員」を新設し、活動の活発化に取り組む。岩国市農業委員会独自の活動として、「農地巡回調査」、巡回調査に基づいた「地域農業の検討会」、市全域の集落ごとに行う「農地と営農に関するアンケート調査」、以上の活動から得られた情報を地域に還元する「地区座談会」などを実施している。



**谷口 和正**氏  
(たにぐち かずまさ)

山代神楽連絡協議会会長

山代神楽共演大会を平成13年に開催。以後、毎年11月に開催しており、第1回から代表世話人を務める。平成18年7月に山代神楽連絡協議会を設

立して以降、毎年11月に岩国市北部の錦町、美川町、本郷町、美和町を開催地として、順番に共演大会を開催。

## 現地視察

- FAM'Sキッチンいわくに
- 錦帯橋





## 歓迎挨拶

岩国市長

**福田 良彦氏**（ふくだ よしひこ）

皆さん、おはようございます。岩国市長の福田でございます。ひとこと歓迎のご挨拶を申し上げたいと思います。今日は「全国過疎問題シンポジウム2018」岩国市分科会でございますが、早朝より多くの方々にご参加いただきました。誠にありがとうございます。今日は各地からこの岩国市にお越しただいております。改めて心から歓迎を申し上げます。

この岩国市は、平成18年の3月20日、今から12年前ですが、8つの市町村が合併いたしました。面積は873平方キロメートル、大変広大な面積を有しております。北は中国山地の山々から瀬戸内海の島々までさまざまな特性、地域性を持っております。

いくつか、わが市がもっている顔、特徴をご紹介します。本日このあとご視察いただくことがありますが、岩国市は錦帯橋、そして国の天然記念物の白へび、夏は鶴飼い、そういった多くの観光資源を有しております。いわゆる観光のまちとしての顔がひとつございます。

また、瀬戸内海の臨海工業地帯の一翼を担う工業のまち、製紙、化学、石油、そうした大手企業の工場が瀬戸内海のほうにずらっと並んでいる、そういった工業のまちとしての顔がひとつございます。

そして、もうひとつが岩国市は米軍の海兵隊と海軍、そして海上自衛隊航空機部隊、トータルで約150機の、多くの航空部隊を擁するいわゆる基地のまちとしての顔があります。ただ、この基地のまちとしての顔は、メディアでもよく取り上げられますが、騒音問題や治安の問題、悩ましき問題はあります。これにつきましては、国に向き合って対策をどうやっていくか。あわせて国際交流、英語交流、そし

て防災での協力、そういった基地があることを現実的にとらまえてまちづくりに活かすという、そうした取組も並行的に行っているところでございます。

そして、最後になりますが、岩国市は酒どころのまちとして、最近世界中から多くの方がお酒を飲みに来ておられるところです。5つの酒蔵がございます。ひとつは五橋。そして金冠黒松。雁木。そして瀬祭。そして金雀。こうした5つの銘柄のお酒が非常に好評を博しております。

こうした岩国市の特性を活かしながらまちづくりをやっていくことはもちろんでございますが、ただこの岩国市も全国にもれず、やはり少子高齢化、これが加速している地域もたくさん抱えているわけでありまして。その中で本日のテーマであります「地域みがきが人を呼ぶ～関係人口を増やす～」、このテーマの中でやはり我々もその考え方、手法をぜひ学ばせていただきたいと思っております。

先週日曜日、この美和町で毎年恒例の秋祭り、サンチャロウまつりというイベントがございました。このサンチャロウは見ちゃろう、食っちゃろう、歩いちゃろうということがテーマで、秋の味覚、特産品を並べて、ステージでは地元の神楽などの催しもございました。7,000の方が近郊からお越しになりまして、大変盛況でございました。こうした地域の力を我々もしっかり後押ししながら、誇れる一流の田舎を目指していきたいと思っております。

本日のシンポジウムが実り多きものとなりますことを期待いたしまして歓迎のご挨拶に代えさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございます。

## パネルディスカッション

**檜谷**／改めまして皆さん、こんにちは。檜谷といいます。鳥根県からまいりました。一般社団法人小さな拠点ネットワーク研究所というのを仲間と立ち上げまして、地域づくりを地域の皆さんと一緒に、伴走しながらやらせていただいています。

また、鳥根県中山間地域研究センターというのがありますが、そちらの研究者もやらせていただいております。今日はコーディネーターということで、務めさせていただきます。

初めに私のほうからちょっとだけ、今日のパネルディスカッションのテーマをお話させていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

さて、今日のテーマは「地域みがきが人を呼ぶ～関係人口を増やす～」です。地域みがきと関係人口が今日のキーワードになってくると思います。これは地域づくりをやっている僕ら、行政、地域づくりのシーンに関わっているメンバーからすると最近結構身近な言葉です。

特に、関係人口という言葉に関して言うと、昨年くらいから今年にかけて、重要キーワードのひとつになってきているということは、周りの様子を見てもあるのではないかと考えていますが、地域みがきって何だろう？ 皆さん、ピンとききますか？ 関係人口ってピンとききますか？ まずそこからではないのかなと僕は思っています。

何となく、みんな、言葉として使ってはいるけど、関係人口って何ですかと聞かれても説明できないということがあるとすれば、まずその定義をきちんとあわせていったうえで、今日の話を進めていきたいということがあります。

また、地域みがきですが、「それぞれの地域の資源を活かし、地域を更に魅力的にし、そこに住む人々が輝くことが大切なのではないか」ということで、今日のテーマの「地域みがきが人を呼ぶ」についてご紹介しました。ないものからあるものを作るのではなく、あるものをどういうふうを活かしていくのか。そこに住んでいる人たちがどう輝いてい

るのかということが、ひとつのポイントです。

それから関係人口ですが、これもそんなに歴史が長いわけではなくて、おそらく最初に出てきたのは、「東北食べる通信」をされています高橋さんの著書の「都市と地方をかき混ぜる」という本の中で、関係人口を増やせという言葉であったと思います。

そこから始まって、ちょっと抜粋的に引用していますが、「交流人口と定住人口のあいだに眠る関係人口を掘り起こす」、そういうふうに使われています。そして2016年12月に、昨日、全体会をコーディネートされた指出さんが「僕らは地方で幸せを見つけろ」という本を出されましたが、その本の中にまさに「関係人口を増やす」という章があります。

そこには、なぜ、都会志向より地方に魅力を感じる若者が増えたのか。それはひとつに関わり代やチャレンジ代が都会よりもずっとあるからだと言われています。この関わり代、チャレンジ代の「しろ」は余白のことです。完璧にうまっているわけではなくて、何となく、この部分はできていないとか空いているとか、ちょっとすきがあるという感じです。そういった余白の部分というのが実はとても大事なのです。自分が行ってもそんなにやることがないという地域では、実はチャレンジングな気持ちにはなれなくて、何か自分でもここだったらできるのではないかという、そういう余白があるからこそ、若者



は地方を魅力的に思い、そこに行って何かに関わろうとするのではないか。そのような意味合いで書かれています。

そういった関係人口というのは何となく移住や定住ではなくて、国も「関係人口とは移住した人口ではなく、観光に来た交流人口でもない、地域や地域の人々と多様に関わる方です」というふうに書かれています。

これは総務省の資料です。こうした国の政策の中にも関係人口というものが出てきました。こうしたポータルサイトも総務省のほうで立ちあがっています。そういった意味で「地域みがきが人を呼ぶ～関係人口を増やす～」という今日のテーマは何なのかというと、どうやら地域みがきというのはあるものを活かして住む人を輝かせるための地道な取組や営みのことをいうのだろう。

また関係人口というのは、そこに住んでいなくても地域に共感し、心を寄せる人のことをどうやら言うらしい。また、関わりが持てそうな部分では実際に活動を始めている人もいます。

こういったのが関係人口だと。そして、この地域みがきと関係人口というのは、どうやらまったく別々のものではなくて、よその視点という言葉であったり、化学反応、相互補完という関係性からお互いがお互いを求めあっているような関係性でもあるのではないかと。それが実は田園回帰につながっているひとつのポイントなのではないかということです。

ということで今日は、この先です。このテーマでパネリストの方々にそれぞれどういった地域みがきをされているのかご紹介いただきます。また、それを関係人口というキーワードでひもといた時に、どういうふうに見えてくるのかということが2つ目です。また、できれば3つ目。今後、僕らは関係人口をどうとらえてどうするか。関係人口の未来像はどういう形がいいのか。というようなことを今日のディスカッションの中で見つけていければいいなと僕は思っています。皆さんにご協力いただきながら進めさせていただければと思っています。

ということで、皆さんのお手元にあるこういった

質問。ここにぜひ、パネリストの方々のお話を聞きながら、誰にこんなことを聞きたいなということがあればぜひ書いていただいて、そしてそれぞれの地域みがきのお話が終わったあとにスタッフの皆さんに回収していただきます。で、僕のほうに届けていただきますので、あちらに回収箱を用意しておきましたが、回収していただきますので全員とはいませんが、ご質問いただける方は書いていただいて、全部は紹介できませんが、それも含めて今日進めていければと思っています。よろしくお願ひします。

それでは初めの10分が長くなりましたが、最初、パネリストの方々のそれぞれの地域みがきをご紹介いただきたいと思います。最初に野村課長さんのほうから、イントロダクション的なお話もいただきますのでよろしくお願ひいたします。

**野村**／それでは皆様、改めておはようございます。私は岩国市市民生活部中山間地域振興課の野村と申します。どうかよろしくお願ひいたします。昨日に引き続いてお越しになっていらっしゃる方もいらっしゃいます。お疲れでございます。よろしくお願ひいたします。それでは座ってお話させていただきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

ただいま檜谷様からご説明がありましたが、今回のシンポジウムを通じて私もしっかり勉強してまいりたいと思ひしております。最初に岩国市の現状についてざっとご説明させていただき、それから今日登壇していらっしゃる岩国のパネラーの方と私も仕事を進める上で常にご一緒させていただいている皆様方でございます。

主催者のほうから、そのあたりよく知っているだろうから最初にまとめて紹介してくださいねというふうに宿題をいただいておりますので、そのことも含めて私のほうから説明させていただきたいと思ひます。

岩国市は平成18年に1市6町1村が合併して誕生いたしました。面積は山口県全体の14%ほどを占めておりまして、約874平方キロメートルでございます。合併前の旧本郷村、旧錦町、旧美川町、そして

ここ旧美和町であった地域、先ほどいいました約874平方キロメートルの約2分の1ちょっとになるわけですが、この地域が過疎地域として内定している地域でございます。現在の岩国市の人口は約13万6,000人ですが、この過疎地域にお住まいの方々は全体の6%で、約8,000の方がお住まいです。

高齢化率は市全体よりも18ポイント高い53%弱という地域です。こうした地域ですが、過疎地域が含まれる中山間地域はご存じのように、多面的で重要な広域的な機能を担っているところでして、この地域にお住まいの方々がその機能維持のために担っておられる。働いておられるというところで

今後さらにこうした状況が続きますと、国民全体の生活にも、広域的機能が低下するというところで懸念されるということもいわれているところです。岩国市においても平成28年に岩国市過疎地域促進計画の作り替えもいたしまして、皆様方と一緒に地域維持、自立のために取組を進めさせていただいております。

先ほどいいました、岩国市からのパネラーの方々と一緒に仕事をさせていただいておりますが、皆さんはまさにお話にありました地域みがきの実践者の方でございます。こうした方々を、私たちの仕事と絡めてご紹介させていただきたいと思っております。

まず初めに、やましろ体験交流協議会の寺本会長です。やましろ体験交流協議会は、本市の錦、美川、美和、本郷の各地域の方々がこの地域での体験型教育旅行の受け入れなどを通じまして、生きがいづくりや経済的な効果を目指して活動しているという団体です。寺本さんはその会長さんということです。協議会では都市部の学校の受け入れなども進めておられ、この地域の自然環境を活かした体験プログラム、ご家庭での民泊を通じたその交流をしておられます。またこの事業では日帰り体験のプログラムによる交流なども進めておられ、今後この清流錦川の上流と下流の交流でありますとか、岩国錦帯橋空港を経由して首都圏からたくさんの方を呼び込んで交流していこうとか、先

ほども市長のご挨拶にありましたが、岩国基地の関係者の方々との交流、そういったことも視野に入れて取組を広げていこうか進めていこうかということも検討しておられるというところです。今日は行政の方もたくさん来ておられますが、私ども行政としましてはこうした交流の実践者であります協議会のお取組を財政的な面や人的な面で支援させていただいていまして、連携共同による交流人口の増加を図っていければと考えているところです。

続いて、山代神楽連絡協議会の谷口会長です。この協議会は山代地区で長く取組が続いている神楽の関係者の方々により地域の伝統文化を守り伝えることを通じて地域活性化を図っておられる組織です。谷口会長はその会長ということです。高齢化が進行するこの地域ですが、岩国市の市街地であるとか遠くは広島市に在住の方々も1時間、2時間をかけて稽古のためにこの地域に再々訪れていただいているという状況です。その地域に伝わる神楽はその地域で稽古をしないと意味がないと、ある神楽の団体の若い会員さんが胸を張って言うておられまして、そうした方々の思いに応えるように、地域の方々の地域を守るためにという誇りを持ってその地域でお暮らしになっておられるという伝統文化の伝承ということの深い、深い意味を皆さん方から私も勉強させていただいているところです。そういった関係づくり、今日のテーマに沿ったことになるのかもしれませんが、皆さん方のおつきあいということでは我々、岩国市の民俗芸能まつりを毎年開催していますが、協議会の皆さんにも積極的に参加していただいております、毎回たくさんの方にお越しいただいているという状況です。

続きまして、岩国市農業委員会の梅川会長です。梅川会長は大変幅広いネットワークを持っておられ、そのネットワークを活かしてさまざまな分野の方々と連携して全県的、そして全国的な広がりをもった活動をなさっています。岩国市でも、他の自治体と同様だと思いますが、遊休農地への対応、対策が大きな課題となっておりますが、梅川会長は積極的にこの問題に、また後継者問題に取り組んでおられまして、私どもが進めています中山間地域

への移住定住関連事業とも関連して課題解決にお取組をいただいています。たとえば私たちが進めています空き家情報登録制度というのがあります。中山間地域にある空き家を登録していただいて、これをPRして市内市外の方にご利用いただく中山間地域に人を呼び込もうという取組ですが、その空き家に付随する農地に関しては農地の売買、贈与、貸与などの保証権利移転について、農地法第3条に基づく許可が必要な下限面積の要件をおおむね1割とするという特別な措置を設けていただいています。新規就農者の地域の呼び込みによる移住定住促進に役買っていただいております。私どもとさまざまな取組を進めていただき、成果を上げていただいているというところです。

そして、小さな集落の人たちが集う連絡協議会の舞田会長です。この地域は玖北地域といいますが、この地域においては集落内の戸数が19戸以下、高齢化率50%以上、これは山口県では小規模高齢化集落と呼んでいます。その小規模高齢化集落が約120あります。小規模高齢化集落の皆さんがお互いに意見交換しながら、行政機関とも協働し、自らの意思に基づいて地域が抱える諸問題の解決に努めようと思われて立ち上げられたのがこの組織です。実は、昨日の藤山浩先生にもお越しいただいて講演会を開くなど、協議会ではさまざまな取組、勉強会をしておられ、情報の収集共有を図っておられます。また、我々に対して、一昨年になりますか、この地域の実態調査をしてはどうかとお声がけをいただきまして、昨年から今年にかけて私どものほうで地域内の117の小規模高齢化集落の701世帯を対象とした集落点検を実施させていただきました。内容については取りまとめをしている最中ですが、協議会の方々とはこのように連携をしていろいろなことを進めさせていただいています。

まとめになりますが、やましろ体験交流協議会の皆様は交流人口の取組、そして山代神楽連絡協議会の皆様には地域外の方との関係づくり。そして農業委員会の方々には移住定住の取組ということを進めていただいているということとあわせて小

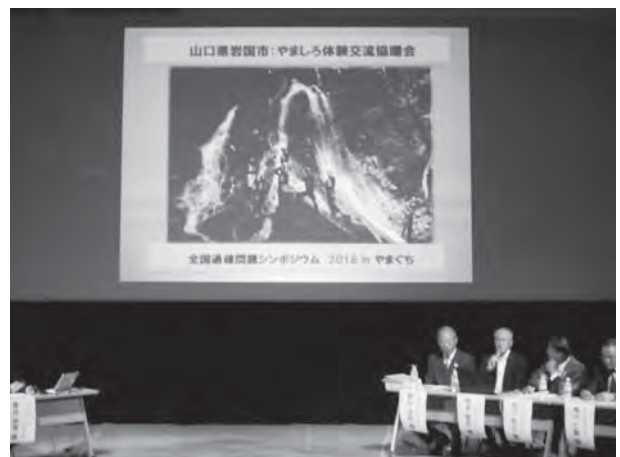
な集落の方々が地元でしっかり根を張った暮らしをその地域で頑張っていこうと声をかけあっているというので、私たちがその活動に連携していろいろな取組を進めさせていただいているというのが現状です。全体をまとめた最初の報告として私のほうからの説明とさせていただきます。以上です。ありがとうございました。

**檜谷**／ありがとうございます。それではここから各パネリストの皆様になんげお話をいただきます。お手元のパンフレットなどもご覧いただきながら、聞いていただくのがいいかなと思っております。それでは最初に、やましろ体験交流協議会の寺本会長さんのほうからよろしくお願ひいたします。

**寺本**／協議会の概要については岩国市の野村課長さんから説明をいただきましたので、私からは、協議会の活動を紹介させていただきます。

最初に、正面のスライドにあります。これはリバートレッキングといって、川歩きを楽しむ、沢歩きですが、この地域、皆さんは午後行かれると思いますが、錦帯橋の下を流れている錦川の上流あるいは支流の最上流域で、名水百選や名滝百選に指定され、水や川が売り物です。そうした中で、一般の方に向けた川のトレッキング、沢歩き、あるいは小学生中学生に向けたリバートレッキングやラフティング、カヌー、そんなこともできる地域です。

山代地域の概要については先ほど説明がありました。山口県の最も東、広島県、島根県に県境を



接しています。この地域は約8,000人、この時点では8,557人とありますが、それくらいの人口規模です。もともと、合併前の錦町で、何とかして、この過疎化が進む地域をにぎやかにできないかということで、ちょうどそのころ文部科学省が推進を始めていた子ども体験プロジェクトというのを聞きまして、この地域のこの自然環境を活かして、小学生や中学生を体験に引き受けられないか、民泊をしてみようかということで始めました。

そうした中で、この限られた錦町だけでは十分な対応ができない、途中で300人規模の修学旅行の受け入れもあったものですから、山代地域全体で取り組んでいこうということで、もともとあったやましろ体験交流協議会を活かしてさまざまな体験交流、この地域の食育、特産のこんにやくを作ったり、おすしを作ったり、草木染めをしたり、そうしたものを探しながら、掘り起こしながら、修学旅行の民泊とあわせて始めたのが、10年少し前になります。

これは民泊の受け入れの人数で、平成20年に1校107名、23年に4校で263名といったように、あまり増えておりません。というのは民泊のできる、受け入れ可能な件数が限られているということもありました。それから、こうして来られる学校は、ずっと続けて、2年おきに来られるとか、あるいは毎年来られる神奈川県や神戸からの中学校というのがあります。民泊ということで中学生高校生をお客様として受け入れるということではなくて、孫や子供たちが帰って来たというような気持ちで受け入れており、それぞれ、家業は、農業などいろいろありますが、そこでいろいろな田舎体験をしてもらうという。それから食事と一緒に畑にいて野菜などを採ってきて一緒に料理をするというような取組をしております。

**檜谷**／はい、ありがとうございます。続きまして山代神楽連絡協議会の谷口会長さん、よろしく願います。

**谷口**／山代神楽連絡協議会の活動を説明させて

いただきます。

山代地区とは、美和町、本郷町、美川町、錦町の4町村をいいます。山代神楽共演大会は、この山代地域に7団体ある神楽団体の横のつながりを作るために始めたものであり、平成13年から取り組んでいます。その後、規約を作って会長を決めて本格的にやったほうがいいだろうということで、平成18年に山代神楽連絡協議会というのを設立しました。



その時に、「守り育て伝える」これを7団体のモットーにしました。

そして、やはり守るためには子どもたちが必要ということで、7団体のうち5団体が「子ども神楽」に取り組んでいます。また、神楽共演大会では、神楽の7団体に加えて、その地区の子供どもたちにも出演してもらっています。

共演大会の会場については、山代地区の4町村を、毎年、順繰りに回ることとしています。そして、山代地区の商工会にも協力してもらって、飲み食いも楽しめるように、うどん、ビール、酒を出店してもらっています。

市街地から人を呼ぶための仕組みとしては、錦川清流線に神楽列車ということで、1両増やしてもらって、龍、大蛇を飾ったり、あるいは鬼が出たり、一緒に記念写真を撮ったり、神楽列車の中でも楽しんでもらっています。

また、関係人口ということについて、我々の神楽には、総勢100名程度が参加しているのですが、そのうち、約30%が周南市、あるいは広島県から通っ



ている方々です。ですから、都市部の若者も神楽に参加しやすいよう、練習は金曜か土曜にしています。そういう形で、過疎地域である山代地域に人を呼び込んで、神楽に親しんでもらえるような仕組みをつくって地域おこしに取り組んでいます。

**檜谷**／はい、ありがとうございます。それでは次に農業委員会の梅川さん、よろしく願いいたします。

**梅川**／岩国市農業委員会は、24名の農業委員と52名の農地利用最適化推進委員の計76名で構成され、この中で2番目に若い私が会長をしております。

平成28年の農業委員会法の改正で、新たに農地利用最適化推進委員という制度ができました。これまでは、農業委員会は農地法の番人という印象が強いかと思いますが、この改正に伴いまして農地利用の最適化に資する業務、農地利用最適化とはということで、今ある農地を集積して地域の農業を守っていくのではないかと。遊休農地の防止と解消に努めていきなさい、新規就農者を確保しなさい。農地を農地として活用して地域農業を振興していく。要は農業振興の業務をやってくださいよというふうに法律が変わりました。

国が示しているのは農地パトロールをやって遊休農地の発生を予防しなさいというのがメインなのですが、我々岩国市農業委員会、28年の改正当時は国からああいうことをしなさい、こういうことをしなさいがまだ示されていない時期でしたので、ではそういう農業振興業務を農業委員会が行うにあたってはどういうことをやればいいのか、ということで、先ほど来、市長からもお話がありましたように、大変広いエリアを有していますので、まず地域の農業の現状を把握しなければいけない。農業委員会が把握してなかったらどうするんかということになりまして、私も全市、この3年間で23回巡回活動を行っています。離島はまだ行っていませんが、ほぼ全エリアの巡回視察をすることができました。

その中で、大変な課題等も山積しているなど実感したので、翌年29年には、だったら集落でどうかが課題で今後どういう方向に進んでいくのかということをお個別農家ごとにアンケート調査を行いました。約半数の集落から回答をいただいています。その中で見えてきたのは、やはり5年10年先にはもう農地を手放さなければならない、そういう状況にある、大変危惧する問題が見えてきたところでした。

そのような課題を、農業の関係機関、市の農林振興課、JAさん、農地中間管理機構、県農林事務所等々と共有しながら、またアンケートで得られたものを集落に返して地区で座談会をやるのではないかと、ということで今年度からスタートしています。この地区座談会は私が思っているのは、やはり地域のことは地域で考えないといけない、地域の定住人口を増やしていこうと思ったらやはり地域で考えないといけないのではないかとということで、あなたの集落にはこういう課題がある、そういうことをまとめる機関が我々農業委員会だと思っていますので、この調査で得られたデータを集落に返還して皆さんで考えようというような取組を行っています。そのことによって地域の宝を見つけるなり、これだったらうちにはこんな新規就農者がいるねというようなことを考えていながら、外にPRしていく、というようなことが、かなり時間はかかりますが、今求められている形、スタイルではないかと思っ取り組んでいるところです。

そのほかにも、来た方々をどういうふうに地元としてサポートしていかなければいけないかということで、新規就農サポーターというのを設立して取り組んでいるところです。

本日の、地域みがきと関係人口を増やすことにつきましては、少し行政サイド的な取組も含まれていますが、農業委員会としまして、独立行政委員会ですので、そういった立場でお話をさせていただければと思います。ありがとうございました。

**檜谷**／はい、ありがとうございました。それでは舞田さん、お願いいたします。

**舞田**／私どもの会はあくまでも連絡協議会ですので、メンバーが手足となって会として何かをしていくといった具体的なイベントであるとか行動をしているわけではありません。

市から、詳しい説明がありましたので、私からは、この小さな集落の住民であるという立場で、これから少しだけ話をさせていただきたいと思えます。

まず、この会ですが、5年前に立ちあがりました。それも、小さな集落というと一応小規模高齢化集落ということで、19戸以下、高齢化率50%以上ということで線を引いています。合併前の町村で錦、美川、美和、本郷を対象にしています。約120の集落があります。

全国的にはこんな集落も多いと思っていますが、ただ、心情としてどうしても小さい集落に住む私どもとしたら、なかなか声を上げにくい。いろいろなことで困っている。将来どうなるのだろうかというような不安。それからある意味での孤立化ということがあります。で、そこについてそういうメンバーで集まって情報、といいますが、なぐさめあいということもあります。ひとつの会を持つというところで始まったのがこの会です。

活動やイベントなどで、人にどんどん来ていただくのは、小さな集落で取り組むのは、なかなか難しい状況です。だからこそ、課題や情報を共有することと、行政とうまく連携していくということが大事だと思います。

小さい集落には、いろいろな困りごとがあります。具体的には、谷水を飲料水にとっている地域で、そのタンクなどの水源の管理が年を取ってできないとか、集会所やそのまわりの草刈りがもうできないとか、今までやってきた集落の行事が難しくなっているなど、本当にたくさんございます。しかし、その一つひとつを役所にどうにかしてくださいというのは、筋の違う話で、役所の方と我々とは話し合いをすることが大事だと思っています。連絡協議会は、その窓口として機能しており、そういうところがいいところだと思っています。

役所との関係については、個人的な思いです

が、役所に要求をして何かをとってくるとかいうことではなくて、役所と一緒に考えて、これはできる、これはできない、それではどうするか。というようなことを一つひとつやっていくこと。それがひとつの集落で事例として成功すればそのことが広がっていく。で、1、2年は我慢してもらおう案件、子どもたちをなんとか呼んでやりたいというような案件もありましょうし、そういったことを進めていきたいというのがこの会でございます。

**檜谷**／はい、ありがとうございます。それでは今日、ゲストパネリストということで西塔さんに来ていただいていますので、西塔さんのお取組などをご紹介いただければと思います。よろしくお願いいたします。

**西塔**／私は福岡県の上毛町というところからやってまいりました。世帯数11軒の小さな集落です。舞田さんのお話を伺いながら、まさに小さな集落に暮らすひとりとして、私も水源の管理をしまして毎週水源地の山に登って掃除をしているので身につまされる思いと、本当にそうだなと思いながら話を聞いていました。

6年前に上毛町という小さな集落に東京から引っ越してきました。移住者です。娘が生まれた際に、この集落で生まれた子供は、何年ぶりといったかな、10年か20年か、くらい久しぶりだといわれました。

最初は、地域おこし協力隊という制度を使って3年間働かせていただきました。その時の仕事のテーマは、全国に5,000人いる協力隊、それぞれさまざまなのですが、私の場合は移住者を増やす移住定住をミッションとした協力隊をさせていただいたのですが、その時に、移住定住って何のためにするのだろうかといういろいろ勉強しました。まさに今日のテーマにつながるかなと思って少し紹介させていただきます。2008年日本の総人口は減少に転じました。日本全体の人口が減るわけですから、まちから人が減ることは、自然な変化ととらえるべきです。つまり考えるべきことは、これからどうやってた